
君は月を見ているか

神田春希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君は月を見ているか

【Nコード】

N5145R

【作者名】

神田春希

【あらすじ】

生まれた時から俺たちは三人で、それがいつまでも続くんだと、そう思ってた。だからあいつが旅に出るって言った時、初めて気づいたんだ。

永久に続く事なんてないんだってことに

（他のサイトにアップした、ポッド視点の小説です）

それは風のように突然で

生まれた時から一緒だった俺たちは、一緒に居ることが当たり前だったんだ。

失って初めてそれが大切だったと気付かされる。

俺達三人が一緒に居る日々は永遠なんかじゃないんだと……。

「僕はこれから旅に出るよ」

デントはそう言いながら荷づくりを始める。

「マジで？」

俺は少し掠れた声でそう聞いた。

もしかしたら 『冗談だよ』と微笑んでくれるような気がしたから……。

「うん。本気だよ。」

僕はあの子 サトシ君に出会って、本当に世界が変わったんだ」
静かな声で、さっきジムに挑戦に来たトレーナーの話を始めるデント。

……確かに今までの挑戦者にはいないタイプだった。
誰か一人を倒せばいいのに、俺達三人と戦いたいと言ったと思えば、
相性の事よりバトルに出るポケモンの気持ちを優先していた。

苦しい戦いになっても、諦めることを知らない真っ直ぐな瞳……。

正直、俺もあのトレーナーのバトルにはぞくぞくした。

ジムリーダーになって単調になってしまった俺のバトルに、新米トレーナーだった頃のバトルの高揚感を思い出させてくれたから。

「だから僕は旅に出て、僕自身を見つめ直したいんだ」

そう言っただけ振りかえるデントの目には、抑えきれないほどの希望と期待とが見え隠れする。

こいつの、こういう顔、久しぶりに見たな

あれは確か、初めてポケモンと旅に出る日だったか？

『待ちきれないよ！』と少し顔を紅潮させていた幼いデントを思い出す。

……。そうだ、こいつはこういうやつだった。

冷静に見えるけど、それは表面だけのことで、内側にあるのは熱い心。

俺達兄弟の中で、一番情熱的なのは多分デントだ。

抑えきれないほどの情熱は、彼の緑色の瞳を妖しく光らせる。

「気を付けろよ？」

俺はそう言いながらポケモンボールを投げる。

ふわりとした放物線を描いて、デントの手の中にすぱりと収まった。

「？ 何？」

「餞別。たまには連絡くれよな」

俺がにっと笑うと、デントはそれを柔らかい笑みで返す。

ちくり。

俺の胸が少し痛んだのは、きっと俺だけ取り残されたような気がしたから

見上げれば白い月

デントが旅に出て数カ月。

三人でやっていた店は、今は二人で頑張っている。

「じゃあ 俺、ゴミ捨ててくるわ」

「ああ、お願いしますね」

コーンはそう言いながら、忙しそうにレジの清算をしていた。

「あ、ちよつと寒いな」

外に出ると夜風が昨日よりも寒く感じられる。

ふと視線を上にとやると、漆黒の闇に一つぽつんと浮かぶのは白い月。

薄く嗤うような月を俺はぼんやりと見つめる。

「三日月」

不意に背後からコーンの声が聞こえて、俺は振り向く。

「デントも見えますかねえ」

慌てた俺とは対照的で涼しげな顔をしたコーンは、そつとそつ静かに言った。

見上げるとそこには先ほど見た、どこか冷たそうな月はなく、替わりにほのかな優しい光に包まれている三日月。

ああ、そう言えば月ってこんなだったな。

三人で旅をしていたころ『もしジムリーダーになったら』って話を良くしてたっけ。

……こんな月の出る夜に。

「そういえば昔、こんな月をみましたね」
コーンはそう言つと静かに笑った。

月の光に照らされた顔は、本当に寂しく見えて、俺は思わずコーンの頭を優しく撫でた。

「ポッド？」

「きつと見てるよ、デントもさ。
だって俺達三人は三つ子なんだから」

にっと笑つと、コーンも俺につられて笑った。

そう、俺たちはいつまで経っても三つ子で、
どこに居ても、何をしていても三つ子なんだ。

*****おまけ『月に見えるは君の顔』*****

「デント、何やってんの？」

少し小高くなった丘で、デントは一人佇んでいた。

「ああ、サトシ。」

今夜は月が綺麗だと思ってるね」

デントはそう言っていると視線を月に戻す。

三日月の光は優しく降り注ぎ、どこことなく幻想的に見える。
ふと思い出すのは、三人で旅をした遠い記憶。

「　　そう言えば、あの二人は元気かな……？」

小さく呟くその声は、夜の風に乗る、何処か遠くへと飛んでいった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5145r/>

君は月を見ているか

2011年10月9日17時02分発行